

マルティネルの街角で

YKI 国際特許事務所 弁理士◇葦原 エミ

Vol.14 声に出して伝えよう

疲れ果てて帰ってきたマンションのエレベーター、知らない人でも「こんばんは」と声をかけ合う。「今日は寒かったですねえ」「本当にねえ」などと笑顔を交わし、ほっこりする。が！ である。あるとき、「こんばんは」と声をかけた相手方のおっさん、ニコリともせず、横目でチラッと見た感じではあるが、それ以上の反応なし。「おいっ！ 会釈ぐらいしろよなっ！」と喧嘩を吹かけそうになる。こういうのって、どーよ！？

「いやいや、知らない人にいちいち挨拶なんてねえ。返事がなくっても仕方ないんじゃないかな」という方もおられましょう。が、しかし、知らない相手ばかりではないのです。

昔、「おはようございます」論争をしたことがある。特許事務所というところは、挨拶、というか、「音声言語によるコミュニケーション」を嫌う人が実は結構多い。まさに「ヒトと話すのが嫌い」と自白した元同僚曰く、「できれば、朝 PC の前に座ってから、夕方仕事を終えるまで、誰とも話したくないです。電話も大嫌いだから、かかってこないで〜ってお祈りしちゃう」。

でも、せめて、朝「おはようございます」と言われたら、「おはようございます」って返してもよくない？ ってなことをしつこく言っていたら、「心の中で言ってるからいいんだよ」と反論してきた奴がいた。

「あんたの心なんて、あたしにゃ読めねえ！」とこれまた喧嘩を吹かけそうになる。

声を出して伝えるということに我々は慣れていないのかも、と思わなくもない。筆者は学生時代、フランスの家庭にホームステイしていたことがある。

そこにはいかにも良家の子女といったふうの米国人学生 2 人も一緒に滞在していた。この米国英語訛りのフランス語には大いに悩まされたが（訛りが伝染ってしまっで。。。）、一つだけ、大いに学んだことがあった。

それは、「ありがとう」の挨拶。

毎晩、ステイ先のマダムが 7 人分の夕食を作ってくれていた。サラダから始まって、いく品かのお料理にデザート。「大変だなあ」ぐらいに思っても、おいしくいただくだけ

の筆者と違って、2 人は「今日もディナーの準備をありがとう」とお礼を何度も述べて、「これはおいしいそうですね」といった会話を始める。

さすがに、あるとき気がついた。甘やかされた子どもがそのまま大きくなったみたいな筆者は、大学時代でも、母親が食事を作ってくれるのを当然のように思っていて、「ありがとう」なんて言うことがない。

それに気づいたときは、なんだか、ショックだった。作ってもらったら、やっぱ、当たり前「ありがとう」だろう、と。

で、帰国後、夕食を作ってくれた母親に、本当に感謝しつつ、「ありがとう」と言ってみた。

「何をいまさら、この子は」といった感じで、でも、母はニコッと笑った。

以心伝心は、日本の最大の美德のようにも思える。でも、分かっていることを音声として伝えるだけで、受ける側の喜びも倍増する。

「おはようございます」「ありがとう」そんな短い言葉が、幸せをもたらすと筆者は結構信じている。



©Emi